



# 地域の人生をほりおこす 聞き書きプロジェクト

2015～2016 作品集

## ●はじめに

東条川疏水は、加東市、小野市、三木市の農地に農業用水を供給するとともに、一部は加東市と小野市の水道水としても利用されるなど、この地域を支える大切な水です。

しかしながら、時代の変遷とともに、東条川疏水によってもたらされる水の恵みに対し、実感をもって感謝する世代は少なくなってきました。

このため、兵庫県では、地域全体でこの東条川疏水について学び、地域の財産として活かし、より良い形で次世代に引き継いでいきたいと考え、地域のみなさんや有識者の方々と話し合い、平成24年3月に「東条川疏水ネットワーク博物館構想」を策定しました。

この構想では、地域の大切な資源である東条川疏水を次世代に引き継ぐために①東条川疏水の名前を地域や地域外に定着させる②地域を担っていく次世代を育てる学習の場として活用する③既にある資源や活動を「ほりおこし・つなげ・むすびつける」ことにより取り組みの輪を広げることを3つの柱として、その具体化を進めています。

その取り組みの一つとして、東条川疏水や疏水にまつわる地域の歴史などを地域の方々からお聞きし、書き起こすことにより、この地域で生きた人々の人生そのもの通じて、あらためて地域のことを知り、見つめ直すきっかけとして「聞き書きプロジェクト」を実施しています。

語り手と聞き手の対話、そしてそこから書き起こされた文章が、それぞれの人生が刻まれたアーカイブとして次世代に引き継がれ、様々な場面で活用されることを期待します。

## ●本作品集について、またその取扱いについて

聞き手が語り手のお話を語り言葉のまま書き起こします。その際、順番等は読みやすいように聞き手にゆだねられますが、「語り手の人格を反映させること」、「語り手が話された主旨を尊重すること」の2点を基本原則として行っています。

その後、事務局および語り手ご本人により確認を行い、本作品集をとりまとめました。

なお、本聞き書き作品集は、「この地域で生きた語り手の人生」を「次世代が記録したもの」であり、歴史的事実との整合については、この聞き書き成果の活用場面ごとで、ご確認ください。

## 目 次

### ●聞き書き作品 2015

1. 近代建築モダニズムの系譜 4  
語り手：内藤正克さん（小野市久保木町/(株)内藤設計相談役会長)
2. 酒米“山田錦”とともに 13  
語り手：藤原 進さん（加東市松沢/東条山田錦振興会会長)

### ●聞き書き作品 2016

3. 雨乞い踊り“秋津西戸百石踊り”について 18  
語り手：針木 功さん（加東市秋津/秋津西戸百石踊り保存会会長)
4. “ふれあい”と地域づくり 25  
語り手：三村良三さん（加東市上福田/県民交流広場「三草ふれあい広場」事務局長)

### ●聞き書きプロジェクトに参加して 36

### ■参考：聞き書きプロジェクト参加者 40

## ●聞き書き作品 2015

## 近代建築モダニズムの系譜



### ●実施日

平成 28 年(2016 年) 3 月 9 日

### ●語り手

内藤 正克さん (93 歳 : 小野市久保木町/㈱内藤設計相談役会長)

分野 / 疏水流域の文化・建築の視点から

### ●聞き手

鈴木 朝道 (22 歳 : 神戸大学大学院生) ★

渡邊 幸太 (24 歳 : 兵庫教育大学大学院生)

## 1. 黒谷池を自費で作った先祖

最初に何でこんなところに住むようになったかということをやっと始めに簡単にお話ししましょうか。私とこの本家はね、東条川ありますね。東条川の向こう側に現在、加東市の旧福田村で東古瀬という町がある。昔は村やったけれどもね。東古瀬から6代前に、いわゆる文化7年1810年ですね。1810年にこちら久保木村へ分家してもらった。なぜ分家してもらったと言いますと、その本家はその当時は大地主で、まああの50丁ほど山やら水田をもっとった。田畑を。その50丁もっておったけれどそのうちの20丁がこの久保木地区にあったわけですね。

ところがいちいち橋渡って管理に来るのがかなんからということで、分家しようということで6代前に文化7年に久保木村に分家してもらった。それが本家は内藤治平正信いうて、農家やけどもまさのぶという名前を付けてもらって、そこから久保木村へ分家していわゆる管理と治水等について一任されたと、分家してもらった時にこちらへんは非常に水の利が悪かった。

川だけでね。それで何とか池を築かなあかんという事で、私んところで負担して築いたのが黒谷池。黒谷池を自費を出して作った。当時で黒谷池、銀180貫という記録がありますが、現在にして2億。それを全部負担して池をつくった。村にも使ってもらおう、村の水田に使ってということで寄付した。

これの記念碑があるんやけど、この碑を私が9年前に作ったんやけど、私が文面をつくって記念碑を建てた。これが黒谷池で、堤に記念碑がある。村人が感謝の気持ちでその時の当主と庄屋のふたりの礼のために、墓碑を建ててくれた。村に寄贈した。ところが昭和36年に大震災があって堤防がきれて、堤防を国が作ってくれた、そんなことで町にすればありがたかった。

## 2. 女系家族

私で6代になるんですけども、昔から内藤家は女系家族でおじいさんは、7人兄弟で男1人。私の母親は女ひとりだけ男なし。そしてうちの親父を養子にもらった、現代の西脇市の落方いうところ、昔の加西郡芳田村落方。今は合併してますけど、はじめは加東郡、そこの芳田村の津田いう家から、父は三男だったから養子にきてくれた。

父の時分は高等小学校がなかった。加西郡の第3高等学校。日吉の小学校の高等科まで行ったんですね。その高等科を卒業して、県立工業、現在の県工の建築家に入学した。県工の2回生です。この当時県工建築科を卒業して兵庫県の土木の建築課へ就職した。

現在県庁の前になくなってしまっているけれど、戦時中、庁舎の前の広いところに県立第2高等女学校を建てた。その現場に行きましたと話していました。その時分は職人の中にはヤクザがおったらしいので、現場管理に行く時は必ずピストルを持っていかされたと話してました。その時に県立の中学校やら女学校を設計したと。それからすぐ大正3年に内藤家に養子にきた。

ひとり娘の内藤トヨと結婚した。私の兄弟も4人女で、私は男1人。私の子どもも娘2人だけ。養子もらったわけですね。今の跡取り内藤五郎も和歌山から養子にもらった。女系家族で。その又娘も女ふたりで。上の子は結婚して下の子が神戸大学を出て東京の東畑（建築事務所）におります。女系家族ということだけ言っておきます。

## 3. 希少な設計事務所

設計事務所は、ところが当時は田舎ですから設計士ってなんですか？という時代ですからね。ほとんど建てもん建てるんは大工が自分で板の上を書いて建てた時代でしたから。兵庫県では神戸に2軒ほどありましたね、設計事務所、姫路に1軒あったらしい。この辺はぜんぜんゼロやったです、設計事務所というのが非常に希

少価値で親父が言ってましたよ。設計を頼みに村長や町長が頼みに来られよった。設計してもらわなあかん。学校とか、今から順番を取ってきますからどないかしてほしい。半年先になりますよ。それでも結構ですと言うて、今とは違うそういう時代でしたな。だから親父自身は好きなように設計でけたと。親父が設計したのは当時、当然木造ですわね。ほとんどの建物が鉄筋に建て替わってますけども、残っているものもあります。

#### 4. 現在も残る当時の建物～好古館

現在もね、西脇の小学校もあります。木造の、県の景観の建物に指定されてますけど、これを残す残さんで問題になってますけども、今現在は残そうという事に決まって来年くらいから大改修して残すということが決まっています。他の建物は規模が小さいですけども残ってますね、ほとんどが鉄筋化されて姿を消しております。後でまた上に事務所がありますので、一昨年、設計をはじめてちょうど100周年になったんで、100周年記念ということで小野の好古館、この好古館言いますのも昭和11年小野小学校の旧講堂を建てた建物が残ってた校舎は全部壊しましたけども、講堂だけ残してそれを好古館という名称で市の資料館にしております。平成2年にね、これが昭和11年に建った小学校の講堂ですね。そういうようにして再利用されてる建物もあります。そこで当然100周年の記念展示がありまして、おやじの作品とか、経歴とか全部展示して3か月間作品展をやりました。特殊なもんで、お寺や庫裡とか所謂、宮大工や寺大工とか特殊な設計もしたが、主に学校が多かった。民間も入れますと300以上仕上げてますね。



#### 5. 播州清水寺の設計

そういう技術は、学校で習ったか自分でまた、事務所開いてから独学で勉強したかですね。そのうちの、大正6年に清水寺(きよみずでら)の清(し)水谷(みずだに)さんに親父のおばさんが嫁いだんで、加西のおばさんが津田甚二郎の家からこの家へ。長男の嫁に加西の内藤に嫁いで来とったんですね。浜路という家から清水(きよみず)さんの住職の奥さんに叔母が嫁いどったんです。そういう関係で自分の甥で建築の設計しとんやからということで、竹田先生に話したら一緒に勉強がてらやってくれたということで、竹田吾一君と一緒に設計したと。その時に本堂は竹田先生が設計されて、庫裡は親父が担当して設計したことを聞いてます。それは大正6年です、来てから3年ほどしてからの話ですね。そういう関係で竹田先生に師事したと書いてあるわけですね。お寺とかお宮とかは自分で勉強したんですかね。なかなか細かいとこまで教えてくれない、器用といいますか、自分で学校で習ったんか大工道具揃えて自分で水屋とかつくってましたからね。最近まで残ってました。手先が器用だったから建築家はある程度器用じゃないとね。不器用ではね図面一つ描くんでも、そういうところが好きだったんかね、そういうことです。



## 6. 親父の跡を継ぐのは当然

最近はなんか公共ものと言え、競争入札して安かったらええと、だいたい官公庁で下地つくってね、設計、積算するだけやから面白くないですな、自分が好きにできませんもの、われわれの時代でも自分の好きなようにできよったからね。ところが今はもうだいたい骨組み作って、図面描けばね、入札してね、誰でも描けるようにして、せっかくの建築家の腕の見せようがないですな。公共もの、入札で談合だとかマスコミは書くし、そういう、時代が変わってきました。設計事務所を始めた頃、最初は4、5人でやってたかな。そこ狭いからということで洋館を建ててその2階で設計を始めるようになった。

子どもの時からね、親父の跡継ぐのは当然男一人やから、覚悟の上で、小学校の時から跡継ぎとして、手ほどきは図面描くのはなかったですけど、わりあい図画なんか好きやったから跡継いで小野小学校から高校へ行ったということです。

私のね正克という名前にはね、例えば6代目なんですけど、3代前私の親父が克雄、克雄と書いてヨシオと読むんですが、それから初代、2代、3代が正平(しょうへい)、正しい、平たい、正平で3代とも正平です、本家から分家させてもらってから、初代、2代、3代が内藤正平、私の爺さん、4代目になって初めて内藤万太郎、そういう名前になって、5代目の親父が克雄という名前、私の正克というのは、代々続いた正平の正と私の親父の克をとって正克と名前を付けてもらった謂われがあるんですね。

## 7. 子どもの頃の思い出

私は、男一人の、小学校や保育園は福田村という、同じ福田村で加東郡福田村で久保木と古川があります。この二つは福田村で当然小学校は福田小学校、小野になったのは戦後、社町福田村は社町に入りまして、その時に久保木村と

その向こうに古川村があります。その二つは当然小野の経済関係に入っとるし、産業がそろばんの下請け工場が古川と久保木に沢山あったんですね。工場というよりも家内職がね。そこで久保木と古川は小野の方がいいという事で、社町に入っとんやけど分町しましてね、昭和30年頃か分町して小野市の方へ変わったんですね。だから今では小野市久保木町、向こうは古川町で小野市の中に入っとるんです。そういう経緯があったんですね。

それで小学校は社ですからもちろん福田小学校、福田小学校ってここから3キロほどありますかな。毎日当然歩いて通ったわけです。福田小学校は今は鉄筋になってます。その前は木造の2階建てこれも親父が設計したんですが、その2階建ての校舎が建ったのが私が小学校の3年生くらいですか。3・4年生ぐらいに建った。それまでは木造の潰れかかったような平屋の建物ですからね。1年生2年生3年生をそこで勉強しました。その時分の気候は寒かったですな。寒いというよりも一番印象に残ってるのは、冬になると机の中に硯ですな、ほとんど習字をしましたから、硯の水が凍ってましたからね。今はもう冷暖房、当時はストーブもないですから、だから寒い所で子どもたち勉強したなと思って。その代りよく鍛えられてるかな？

冬でも雪が20センチほど降ってましたね。雪が見られましたね当時は。それから田んぼの中に霜柱が立って、夏暑い歩いて、昔の子どもは強かったんかな。そういう時代に鍛えられてるから多少は抵抗力ができてるんですかね。それからいわゆる小学校が6年間、卒業して高等小学校に入りましたね。高等小学校、福田小学校の中に高等科というのがあって1年2年があったんですね、ほとんどの者が中学校いかんと高等1年と2年と、もちろん6年生で卒業してやめていく者もありますけど、半数くらいは高等小学校まで行ってました。6年生で卒業して中学校へ行くその時分は小野中学校しかありませんでした。小野中学に行ったのが昭和



10年、11年ですか。小野中学は当然、自動車もバスも何もないところですから、皆自転車で当時はアスファルトの道なんか無かったですから砂利道を通ったわけですね。ある時、真冬だったかね、中学校に通ってね。自転車で175号線、旧道がありますね。古川通って坂上って仰臥池の所通って旧県道ですか。それを冬のある時通った時にですね、ちょうどカーブのところで、昔は砂利道ですから、砂利のないところ自転車が通るわけですか。向こうから魚屋がね、トロ箱という魚を入れる箱がありますよね。あれを積んだ魚屋がきたんですね。ところが道は広いのにこっち側だけ通るからそこだけ砂利がないから皆こっちを通るわけです。こちらは左側通行だからこう行きますわね。向こうは右通らないかんに左側きて、ちょうどすれ違いざまに自転車とトロ箱がひっかかったんですね。ちょうど池やったから池に飛び込みましてね。冬やったけども水が少なかったから、それでもこちらへまで浸かったかな。自転車の後ろに括ってるカバンもびしょ濡れ私自身もびしょ濡れで、魚屋のおじさんが引き揚げてくれて、いっぺん家に帰ろうと思ったんですけどそのまま行った。びしょ濡れやし学校の先生が職員室で、本も何もかもびしょ濡れやから全部干してくれてね、それが冬の一番の思い出です。私がどうして家に帰らなかったといひますのは私が小学校の3年生の時に6年生の卒業式に出たんですね。そしたら1年生2年生は狭いから出られへんけど3年生4年生5年生は卒業式に出るわけですね。そしたら優等賞、皆勤賞がもらえるんですね。優等賞は賢い人がもらうんで皆勤賞ってなんだろうと思ったら、皆勤賞は休まずに来たもんにあたるんだと聞きましてね、優等賞は無理やけど、皆勤賞は休まんで行ったらくれるんやったら一つがんばったろかと思って、そして4年生5年生6年生と頑張って皆勤賞3年間もらいましたね。この分だったら中学校いっても一つ頑張ったれと思って、中学校の1年の冬とんぶりがえったんです。今帰ったらまた

欠席になってしまうし、そのまま学校へ行って皆勤賞もろたろう思って、1年生の冬に皆勤賞をもらって、また2年生も行けると思って2年生も皆勤賞、3年生4年生5年生と頑張ったら全部皆勤賞で、1日も休まんと、だから小学校の4・5・6・と1・2・3・4・5と8年間1日も休まずに行ったんですよ。今の元気な秘訣になったのかな。そんな経験があります。

## 8. 設計するために建築科へ

卒業後は昔神戸高等工業というて、今の神戸大学に入学しました。当時は3年制で、建築の高等工業はね、神戸と名古屋高等工業とそれから福井とそれくらいやったな。親父のあとを継がんといかんからね。神戸高等工業に幸い入学できて、神戸の時は明石に下宿して1年、2年3年は神戸でしたね。場所は西代の駅を降りた南側になります。一学年80名とってましたね、戦時中か、1クラス80名でしたね。80名と言っても実際70名ほどでしたけど。まだ戦争が始まっていませんでしたからね。昭和15年やから、あの時代は勤労奉仕も行ってなかったいい時でしたよ。もちろん戦地や戦中からの大佐からね、昭和16年の途中で始まったんやな、もちろん軍事教練をずっとしてましたよ。中学校の時から、必須科目で習うことができました。そういう時代やったから、神戸高等工業時分でも軍服着て、電気と機械に軍服着た人が来ったね。将校が来てました。研究生みたいな形で来てましたね。そういう時代でした。大阪師団、たぶん大阪へんから来ったんですね軍服着た研究生みたいな形で電気と機械科にはきてましたね。そういう時代でしたね。設計するために建築科行っとるわけです。ところが設計というか建築科を出たものは、半分そうですね、70パーセントぐらいまではゼネコン、建設会社就職してましたね。あと30パーセントは設計事務所、あとは自分で始めるとかですね。



親父が学校出てすぐに設計できないから、現場で修行してこい。そこで、就職したのが中嶋組ゆうて兵庫県ではゼネコンで一番トップやったんです。もう潰れてしまいましたけども、中嶋組というのがいいからという事でそこへはいったんです。中嶋組に就職してその会社がね三宮の阪急会館、阪急会館の北の道おいて中嶋組の本社がありました。そこへ就職してその時に、戦中ですから現場行けということで、初めて行った現場が鶴野飛行場の格納庫、三宮に居る時には、格納庫の設計しました。木造ですけどね。木造のスパークが30mある、それで現場近くだから行けということで鶴野の現場にやらされました。その時私んところから鶴野で近いですから自転車で現場へ通ってましたね。木造の建物です。その建物はほとんど潰れてしまっただけで今は何もないです。そのひと棟が現在残ってます。移築されて、それが姫路の京口駅になります。京口駅の手前、市川沿いに建設会社が倉庫にしています。もらって帰ったんやろね。そのひと棟だけ残ってます。あのときには5棟か6

棟を建てたんですけどね。格納庫やからその一つだけ持って帰って残しとるんですな。鉄骨がなかった時代ですから、当然木造でのトラスでやっとなんてですな。運送会社、そやんな運送会社や。それだけですね、ひと棟残ってるのは、珍しい建物です。

## 9. 戦争の思い出

青野原演習場がありましたやろ。昔は関西でも有名な演習場だったんですな。それでね小学校3年生の時やったかな、姫路師団が秋になるといつも演習しよったんです。その時の師団長が館川芳治中将で師団に私はよう見学に行っていましたわ。で私が通っていた福田小学校から西へ2キロの所で姫路師団がいつも演習しよったんですわ。師団長の館川芳治中将が何で有名かということ、当時、少年倶楽部といって小学校の子どもが読む雑誌といったら少年倶楽部しかなかった。少年倶楽部と少女倶楽部、少年倶楽部は皆が読むんではなしに、ある程度裕福な家の息子が読む雑誌で、その少年倶楽部に山中峯太郎の敵中横断300里という軍事小説が載っていた。日露戦争の時に満州を舞台にしたロシア戦争の時の斥候グループを話題にした実話小説だったんですな。その一番のヒロインが館川中尉（当時）で、兵隊を5、6人つれて敵中深く偵察に行ってた。その物語がずっと毎号載っていて、皆で回し読みしてたんです。そのヒロインが館川芳治中尉だったんで、その小説のヒロインが現実に師団長になって青野原にきてるという事で先生はもちろんのこと皆で見に行っただけですな。現実に小説の中の館川中尉を目のあたりにしたのですが、その時はよく太って頭もちょっと薄くなったような師団長やったんですな。昔のそれこそ馬に乗って走り回ってた面影が全然なかったんですけども、そういう時代でしたな。小学校の時に満州事変が始まって。

真珠湾攻撃した時一方的にパーっとやって、その後ずっとマレー沖海戦か、あの時にやめと

けばよかったな。アメリカが日本もなかなか抵抗するなと怯んだ時があったんですね。あの時にやめとったらある程度の条件付けて、どっちも収める気になってたから止めとけばよかった。ミッドウェイ海戦も負けてちょっと遅かったですね。新聞も勝っていると良いように良いように、悪いこと書かんと良いように書いてましたからね。その時分が悪かったですね。マイナスでした日本にとってはね。マレー沖海戦でばあとやめとったらこんな事態にはならなかったでしょうね。欲がでるしね。勝つし軍部自身が今更引けない意地があった。

私自身が第2乙種やから、相当背が小さかったし、大概第2乙種まで招集がくる、日本があかんと思ったですね。第2乙種までが現役ですが、第2乙種まで召集されて「あかん」と思ったですね。昭和18年くらいである程度犠牲払ってでもやめとったら今みたいなことにとられるようなことはなかった。ところがやっぱりなかなか軍部が意地でもということだね。第一食べるもんはないし、油はないし。

われわれ田舎はどうか食べてましたね。町の方は代用食で、配給で当時、米が何ぼ、一日に1人2合かな良いときで、今みたいに食べるもん沢山あればね、その当時食べるもんないから。何もかもが配給やったな。タオル一つでも配給やったね、医療切符、だからシャツとかそんなもんまで配給やったな。昭和17.8年ぐらまでは良かったですね、どうか、19年になつたらもうだめでしたな。硫黄島とかサイパンとかから飛んできよるからね。完全に負け戦。わかってからいっとるんやから、絶対負けるとは言わなかったな。

## 10. 東京大空襲で間一髪命拾い

無理に戦争のことは説明、教えんでもいいけども基本的な国を大事にするとか愛国とかね。そういうことについてははっきりともっと教えるべきやね。何も軍国心を教えるんじゃないですよ。日本という国をいかに大事にするかと

いうことを、さきほど言った道徳教育をもっとしなきゃいけませんな。漢字の基本ができてないね。今の学校教えてますが肝心の人間としての基本的な事を教えてない。だから親が子を殺したり子が親を殺したりする。そういうことが一番基本であると教えてないですね。教える先生自体も教育受けてないから教えれないんか知らんけども、やはり今の時代はいかに人間としての人としての道をもっと教えないかん。私からすれば非常に残念なこと。

私がね、東京の幹部候補生の学校が今は板橋区になってますな、そこに幹部候補生学校がありましてね、そこへ入学したわけですね、あちこちにありましたけど、私は神戸という関係でその幹部候補生学校に入学しました。その時神戸高等工業の同級生で4人ほど行ってましたね。そこで半年間教育受けるわけです。教育を受けてから各師団へ配属になる。そこでもういっぺん試験があるんです、甲種乙種のね。甲種に合格すると士官、乙種になると下士官にしかなれないと、幸い合格し士官になれました。

毎晩は数機ほどしかきませんけども脅しに来るだけで、来てもバラバラしか来ない。日本の記念日ですかね。陸軍記念日とか海軍記念日とかそ天長節とか良く知っとんですね。その日の晩には必ず来よりましたね。最初来たのは3月10日の陸軍記念日に来ました。その時学校におった時分やから、300機きてそれから焼夷弾を落とすんです、焼夷弾はね、束にして落とすんですね。100個ほどあるかな、弾が花火みたいなもんです。3月10日の時には下町がやられていますね。東京の3分の1がやられましたな。毎晩来ました。来なかった日はないですね。昼来る時にはね、高いとこ飛んで来るんです。日本の飛行機が逆にやっとな追いついてもすぐ落とされてしまう。よく見ました。中にはね、体当たりしたやつも見ましたよ。向うは爆撃機でっしゃろ、いくら戦闘機がいても跳ね返してしまう。特攻隊の体当たり。向こうにしたら何も堪えないわけですな。東京師団に配属になっ



てから5月27日が海軍記念日で、ちょうど土曜日でしたわ。この日は来るなと思ったら案の定きましたわ。東京師団の私が週番士官の番が回ってきて、ちょうど27日の晩が当たってね。伝令1人兵隊1人連れて見て回ったですね。その時に焼夷弾の爆撃を受けてその一発が雨あられに落ちてくる中、私は防空壕に頭を突っ込んでしまったんですが、伝令は5,6メートル離れてましたから右足やったかな、直撃を受けまして包帯もなかったんでゲートルで縛ってすぐ近くの野戦病院というか診療所に担ぎ込んで治療したんですけども、骨をやられてるんで切らなくてはいかんという事でしたわ。膝から下を切ってしまったですね。私は間一髪で助かった。伝令が身代わりになってくれたのですね。

## 11. 設計の仕事

親父の後を継いで事務所をかまえたわけですが、親父は親父としての時代を生きて、親父自身はよき時代に生きたと思います。今親父が生きたら、設計事務所やめとったと思いますわ。

設計というのはひとつの芸術で自分の趣味半分、金儲け半分ぐらいに考えると、金儲けやったら、アホみたいに設計なんかせんとぼろ儲けしとったらええという時でしたが、親父も一緒に、私自身も一緒に、やはり設計というのはひとつの技術やし、ある程度の芸術性もあるのでね。やはりその自分の腕をいかに現物に生かそうかというのがひとつの設計であると私は思うんですよ。図面書くとね、図面は100分の1とか200分の1の大ききさで書くわけです。市場へ出るとそれが100倍、200倍になる。現物に立体的に出来るわけです。絵描きは絵を描いたらそのままいいが、設計者が図面を書くと現物にそれが地上に出来上がる。それひとつの非常な魅力でね。私はそれでね設計言うのは非常に芸術性があると、そのかわり責任がありますわな。建物やから、必ず人が住むわけで、彫刻のように命に関係ないものじゃ

なしに、必ず建物の中に人間が住むということは人間の命を預かるとるわけですから。自身建物とともに責任がある。学校やったら、何百人という子供が学校の中で勉強したりするし、どんな建物でも何百人という人が生活するわけやから、責任がある。責任があるかわりに自分の思ったとおりのものが出来上がる。非常に魅力がある。いい職業だなあと感心しとったわけです。

## 12. 戦後の生活

7, 8年は食べものを作りながら設計してましたからわ。昭和26年に新制中学の学区制ができた。小学校だけやったんが、小学校と中学校ができ、たちまちその時に校舎の設計の仕事が出てきた。その当時は木造で、小学校に増築して中学校を作るところが多かった。小学校の中に1棟を増築することが多かった。そのうち、建てる場所を探してから中学校を建てるようになった。一時(いつとき)でしたから、夜も寝ないで設計した時期がありましたわ。だんだんと30年くらいになってきたら、ぼちぼち鉄筋が出来てきた。一番最初に小野中学がこの辺では鉄筋で校舎を建てた。鉄筋を見に行っただのは、町長やら、町会議員やらと一緒に芦屋の山手教会に視察に行きました。

あそこが鉄筋で見に行こうかいうて行きました。これはいいということで小野中学を鉄筋で造ったんです。

その時分は生コンはないんです。コンクリートはない。セメント袋があって現場で砂と砂利、トラックがなかったから、馬力で運んできて砂とバラスとセメントをまぜて、ミキサーで練ってリフトでね。揚げてもらった。リフトで2階、3階とあ揚げたやつを一輪車で持って行って流す。それが初めての鉄筋。それ以後鉄筋が増えてきて、木造が無くなって、鉄筋の校舎になった。また鉄筋の校舎は建て替えてます。

終戦20年に帰って来て、21年の春に結婚した。早かったですよ。

結婚した時は食べていかなあかんから、いろんなことしてましたよ。稲刈りしたりね。23歳で結婚したからね。いろんな経験をした23年間ですね。子供は23年生まれです。

私はいろんな役をしとったから。防衛協会はね。自衛隊があるんでね。自衛隊に協力するということで、防衛協会があるんです。もう10年かな。自衛隊の後援組織です。講演会にもまわるんですよ。加古川の本線から西側はみんな自衛隊の恩恵があるんですよ。それに対しての協力隊です。

瑞宝章は県の建築士会の推薦です。70歳以上の人やから、私は69歳の時に申請しました。

勲5等とかいろんなものがありますがようわからん。親父も勲5等をもってます。これは勝ち負けはないですから。

設計事務所は今も一人でも事務所を開いていますね。一匹狼でも資格は同じ。うちでもやめた者が事務所をやってますけれどもね。

いつも言うんですが、昔のタバコ屋より、設計事務所が多いな、言うてます。ある程度成功したものの組織化したものに許可をおろしたほうがいいのではと思いますね。そういう点で逆にマイナスですね。

### 13. これからの地域に望むこと

建ても自身の、消耗品になっていますね。傷みもないのにつぶしてまた建て替える。それは各自治体の長が悪いですね。市長にしたって自分の代に早よう建物を建て替えたなら自分のひとつの手柄になるように十分使える建物でも、つぶしてしまってまた建て替える。ひとつの消耗品。外国では何百年も前のものがまだ残って使っている。ヨーロッパへ行くとそれこそ千何百年経ってますとか、建物がそのまま残っていて使ってますわね。玄関だけではなしに町並みに溶け込んでいる。ぜんぜん建物に対する考えが外国と日本では違います。古いほうが価値が高いと反映されていますね。日本は原価償却。

歴史として残すものは極力残して欲しい。建物だけではなしに文化的なものは地域に残して欲しい。新しいものもよろしいが。残すべきものは大事に残して欲しい。

いわゆる建物として、価値の無いものは当然抹消していいのですが、ある程度価値のあるものは極力残して欲しい。私はいつも周囲にも言うんですけども、設計する時は、やはり建てる人の身になれと。それから使う人の身になれ。それを頭において設計せいと。

建てる人というのは、時分の金を出して建てる人もいるし、市費、町費を使って建てる人がいる。いろいろやけど。そういう人はかなりの犠牲を払って立てているんやから、建てる人の身になって自分は設計せいと言っている。今度は住む人、使う人の身になって設計せい。建物は人が住んで使うんやから、使いやすいように設計せい。と言っている。若いもんは使い勝手の悪いもんを設計してますけどね。



## 酒米“山田錦”とともに



### ●実施日

平成 28 年(2016 年) 3 月 17 日

### ●語り手

藤原 進さん (72 歳 : 加東市松沢/東条山田錦振興会会長)

分野/酒米山田錦、村米制度

### ●聞き手

藤原 杏里 (20 歳 : 兵庫教育大学 3 年生) ★

渡邊 幸太 (24 歳 : 兵庫教育大学大学院生)



## 1. 生い立ちについて

もともと、僕は、吉川なんですよ。今は三木市吉川町、昔は美囊郡、一番古い話では美囊郡北上村いうて上吉川の北谷小学校いうてありますねんけどね。それが合併して吉川町になって、吉川中学校2回生ですわ。

それから県立有馬高校農業科入って、3年で卒業しました。それで、神戸マツダいうところに就職しました。当時は整備士で入ったんです。そこからいろいろあって、西脇へ転勤なって、ここへ養子に來ました。婿養子に來てから、僕の場合はこっち來てから長女と結婚してたんですが、長女が出來て1年後くらいに産後の疲労で家内が亡くなったんです。その当時、妹がおったんです。その妹も縁談が決まっていたのですが、結納まで破棄して、家を守らないかんいうことで、その妹と一緒にたったんです。

当時は朝から起きて草刈りしたり、いろんなことをやって会社へ行っていました。その時は営業やってまして何時に帰るかわかへんからね。今日は絶対これだけはせないかんいう意識があるからね。営業は20年ほどやって、親父がもう百姓できない。いうことになりまして、55歳で会社辞めて今まで専業でやっています。

## 2. 山田錦の生産について

山田錦ができて80年、親父のあとついで守っています。農業は毎年1年生です。最近になって気候やら、1年1年、温暖化になったり、夏は雨ふらへんかったり、ゲリラ豪雨があたり、自然との戦いですからね。毎年1年生ですわ。私は今まで上手につくったというても今年も駄目かもわからへんかもね。

山田は特徴あるのは背たけがながい。穂も粒も大きい。背丈が長こうて、粒がようさんついて大きいので、台風がきたら一発で横になってしまう。そのへんの肥えのやり方がむずかしい。気象なんて長期予報見てもあてにならへんもん。1週間の気象が分かればいいけど。毎年、

気象、温度の変化とか年間の雨量とか、気象庁がグラフ化して教えてくれますけど、1度上がるだけでも様子が変わってくるからね。



## 3. 東条山田錦振興会

もとは農業者連合で、そこから好きな人ばかり寄って会を作ろうかいうことで、出來たのが東条山田錦振興会です。最近山田錦の里探訪ウォークを企画しています。東条のとどろき荘を出発して道の駅まで行ってまたとどろき荘に帰ってくる、12kmを歩くんですわ。去年から、加東市が酒蔵を呼んで乾杯まつりをして、それと一緒に探訪ウォークをやった。去年はじめてやって、今年も9月にやろうかなと思っています。あとは研修会とかもやっています。野菜の直売所とかの視察とかね。東条山田錦が生き残るための講演会なんかもしました。

東条山田錦振興会の会員は全員農業をしている人です。最近百姓をする人がちょっとずつ減ってきてね。採算ベースにのりませんからね。倉庫建てたら機械なんかは場所とるから、都会の人がみたら農家は金持ちやと思うとおもうんですが、実際は違うんです。機械を買うにしても300万から1千万。田んぼするにはトラクター、田植え機、コンバインはいる。トラクターはベンツと同じくらいの値段するんです。あと乾燥機もいる。選別もしないかんし。

この辺の百姓は平均7反か8反ほどの田んぼを持っています。うちの作付けは2町7反。田植えはできて1日で1町かな。稲刈りでも乾燥

機に入れるだけしか刈られへんから1週間ほどかかる。雨もふるしね。時間がかかるんです。

#### 4. 水争い

今は、東条川のおかげで田んぼに水が入るけど、昔は雨ふれへんかったら水の取り合いやった。僕は経験無いんですけども、親父から聞く所によると、昔は池の水を1週間に1回水を出しよったそうですわ。大きな池はいいけど、こまい池はすぐ水がからっぽになる。水の取り合いでしたわ。それで水当番ができたんですね。安政池ができるまで、東条川からの水を引いたのは上の部落だけですわ。他は池だけ。山と雨の水の池だけ。田植えの時でも水を落とさんと田植えしてくれない。水争いは最終的に区長とかが口挟んで和解する形になりますけどね。ひどい時は殴りあいしとったけどね。夜中田んぼ水見てよそへ入りよったら堰板はずしてしまふとかね。植えたらそんなにようさん水いらんのやけど。ダムの水なくなったら、一番先に規制がかかる。稲が枯れるたんぼがなんぼでもある。震災の前の年は大干ばつやったけど、ここらはそんなに影響なかった。規制はかかりましたけどね。1週間に何日いうてね。水が一番大事や。人間が生きるんも水が大事や。



#### 5. 米制度について

村米制度というのは、まあ、もともと昔、吉川もそうやけど、農協を通じてうちの部落やたらどこの酒屋へ優先的にここに買っていただけ。ライスセンターというのがない当時ね。村

米制度がなかったら、うちの米がどこいくかわからんしね。ライスセンターへほうりこんだらどこの米か、ばらばらやからどこの部落の米かわからんようになる。農家は直接うりたいですよ。村米制度したら、いろんな酒屋と交流会が出来て、向こうはどんな米が欲しいのか聞くことも出来るしね。でも相手がパンクしてもうたらお金が入ってきません。農協通したら、補償してもらえます。

この部落はライスセンターが遠いから、参加する人が少なかった。酒屋も優先して村米制度をしていただいて、最近東条も増えたし、田んぼにたくさん旗たってますでしょ。あれは契約していることです。

#### 6. 東条のお米

ここらへんは特A地区いうてね、ええ酒米を作ってるところなんです。「白いダイヤモンド」って宣伝してもらいまして。山田錦いうのは粒の内にあるの心白（しんぱく）がずれんと真ん中にあるのが特徴。いい酒を造るには米の周りをけずってしまうから、心白が真ん中にあることが大切なんです。

米は網の目で選別して、質が落ちたのが中米。その下が落ち米。ええ米は30kgが18袋ぐらい取れよった。せやけど、グレードアップいうて網目が大きくなった関係で、そんなにとれなくなってしもた。落ちた米は酒にしたり、お菓子にする。できた糠もお菓子にする。味噌、パン粉やいろんなものにするんです。

お米は一袋なんぼいうて、値段きまっとるんです。特上、特、1等、2等、っていうランクがあって、道の駅出したら1万円。農協出したら5千円。兄貴が米の検査員で、特上と特はあんまり値段が変わらへんから、特上より特で量を沢山とったらい、言うてました。うちで作っとる米は、だいたい特上は20%。特が75%、1等・2等は5%くらいです。

農業は1年に一回しか金はいってこないんです。サラリーマンやってたら、月々入って

くる、そんなんで、若い人は農業をやりたいがらん。家の跡とりはおるけれど、農業の後継者はおらんのです。



れと、個人的にうちの部落でも長続きしないと思うんやけど、勤めとってやからね。田んぼ借りてしよってやけどね。返したら、そこの地権者は困ってもうてやと思うけどね。私も1000平米ほどあずかってしよんねんけど、早めに返さんないかんとおもっとるんやけど。集落営農が一番いいと思います。

## 7. 山田錦に対して思っていること

米はぼくらの生活のもとになっているし、ええ米作って、酒蔵でええ酒作ってもらって、みんなに喜んでもらえたら、一番ええのやけどね。酒米がなかったら、とうに農業やめとるな。

うちの部落の山田錦を送っている平孝は東北が主やけど伏見、山口にもある。酒のレッテル見ても分かるように、大体兵庫産山田錦100%と書いてあるんやけど。うちのとこの酒米を使っているところには兵庫東条産山田錦100%と書いてもろうてる。東条山田錦100%と書いてある酒をみたらうれしいよ。せやけど、このへんの人には山田錦のこと知っとってやけど、山田錦が何か分からん人はようけおる。酒蔵は山田錦いうたら、ええ米やでいうのは知っとってやけど、一般の人はぜんぜんわからへん。まだ世界的に見ても日本酒というのは普及率は少ない。ワインとかやったら、原価が安くて高く売れる。日本酒は原価も高い割に売値が安いんです。だから加東市のもっと山田錦、酒米の山田錦を発信せないかんね。それが上手なのは吉川と中町かな。こだわりのある米を作らんと、これからは残っていかんと思う。

## 8. 農家をどうしたらつないでいけるか

部落の中に一人でも二人でもひっぱり人がおっていただいたらできると思うんですね。そ

## ●聞き書き作品 2016

## 雨乞い踊り あきつさいどひゃっこくおど “秋津西戸百石踊り” について



### ●実施日

平成 29 年(2017 年) 2 月 17 日

### ●語り手

針木 功さん (69 歳 : 加東市秋津/秋津西戸百石踊り保存会 会長)

### ●聞き手

古泉 啓悟 (20 歳 : 兵庫教育大学 3 年生) ★

宮内 俊輔 (21 歳 : 兵庫教育大学 4 年生)



## 雨乞い踊り“秋津西戸百石踊り”について

### 1. 針木さんの生いたち

生まれた時からずっと東条町（現 加東市）に住んでいます。この西戸地区さいどには28戸しかありません。

昭和20年に終戦して、父親達が戦地から引き返してきた当時は、35戸の集落でした。

私は昭和22年生まれで、西戸地区の同級生が女子1人、男子9人でした。一人だけ中学校進学の際に三田学園に行きましたけど、あとのみんなは小学校から中学校まで、遊ぶにも何をするにも、ずっと一緒でした。

それが高等学校に行くようになると不良になってきて、親に無茶を言って単車を買ってもらって走り回っていました。どの家でもそうだったと思うのですが、親が農協でお金を借りて買ってもらっていました。それで、この辺りで単車を持っているのが集まって、当時は雷族と言われていました。今で言う暴走族のようなことをしていました。警察がこの辺りに目をつけていたので、白バイが来たら蜘蛛の子を散らすように解散する。白バイに誰かが追いかけると、それを振り切ってまた集合場所に戻ってきていました。今はそんなことをする人もいないでしょうね。



### 2. 百石踊りについて

西戸地区は小さい地区なので、区長などの役

員は、順番制みたいなものです。

かつて西戸百石踊り保存会の会長をしていた人から、「次の会長をやってほしい。」と言われていたのですが、私より先輩が何人かいたので、しばらくは断っていました。それに、しばらく干ばつもなかったのも、百石踊りの活動もしていなかったんです。

ただ、私も役員になるような年齢になり、年上の先輩方も地区の役員としていろんな仕事をされていたので、区長を務めた後に西戸百石踊り保存会の会長を引き受けました。

百石踊りの記録を見てみますと、室町後期から始まっています。住吉神社の氏子が11地区あり、実際に踊っていたのは8地区で、残りの3地区は準備や世話を回っていたようです。

西戸地区だけになって以降は昭和36年に踊ったのが最後で、それ以降はどこも踊っていませんでした。何故かという、利水が良くなって、その間は干ばつがなかったからです。

あるとき、お酒の席で老人会の誰かが百石踊りの歌を歌い出して、そのときに誰かが踊ろうとしたのですが、長い間踊ってないから、誰も踊れなかったんです。そこで、皆で一生懸命思い出しながら踊り始めたのが、西戸地区で百石踊りが再興したきっかけです。それが昭和36年で、私が14歳の中学生の時でした。22年ぶりだったそうです。

百石踊りは干ばつの時にしか踊らないので、『幻の踊り、幻の舞』といわれていました。だから皆忘れてしまい、氏子だった他の地区では衰退していったのです。幸か不幸か分かりませんが、西戸地区にはたまたま踊りを知っている人が数人いて、偶然にもお酒の席で誰かが歌い、踊ろうとしたことがきっかけになって今に至ります。他の地区では今は全く踊っていません。





### 3. 平成6年の踊り

その時は、私は太鼓打ちをしていました。踊りが終わる頃にぽつぽつと雨が降ってきて、調子が出てきたかと思っていたら、帰る頃には本降りになってきたんです。新聞社も取材に来ていまして、夜になって住吉神社に電話があったようです。「まだ降ってますか？」って。それで翌日の新聞に掲載されました。こういうのはタイミングですけど、そのときは気持ちよかったですね。二十数人で踊りますので、「やった」という喜びとか実感がありました。

あるときは、百石踊りを踊って、雨が降り続いた年もありました。大げさにいうと、洪水の一步手前にもなりました。この辺りは農業が盛んですので、雨が必要なときもあるし、必要ないときもあります。雨が降りすぎると、「百石踊りを踊ったから降った」って言われるんですね。昔は干ばつの時にだけ踊っていたので、百石踊りのせいで雨が降ったとは言われなかったのですが、今は年に1回は踊っていますので…。

毎年踊るようになったのは、今までの経験から、長い間踊らなければ、また忘れてしまうと考えたからです。今はビデオやDVDがありますけど、やっぱり生で伝えていかないと、細かいところは伝えられませんので、そういう意味も含めて毎年踊るようになりました。

それから、住吉神社の宮司さんから、お祭りの行事として参加して欲しいと依頼されていたのですが、毎年神社の行事に使われるのは嫌だという意識があって、4、5年は断っていました。でも、よく考えたら、また長い間踊らずに忘れてしまうよりも、毎年踊って残していった方が良く思うようになって、もう6、7回、毎年住吉神社で踊っています。

ただ、踊る人がだんだん高齢になってきているので、体力的に厳しいというのがあります。たとえば、女性の踊り子が12人踊るのですが、一番上の人は65歳くらいですが、1曲終わるごとに曲間は座ります。すると、次の曲が始まって立ち上がるのが大変なんです。それが6曲あるので、もう立てないと言われるんです。(笑)

体力的なこと以外にもいろんな考え方があって、わざわざ踊らなくても良いのではという声もあります。百石踊りの意義とか意味がいまいち分からない、それ以前に家の仕事があるという人もいます。

毎年4月29日が本番ですので、通常はその1ヵ月前から、踊るメンバーが変わった年には、さらにもう1ヵ月前から練習を始めます。2、3年前にメンバーが10人ほど変わった年は、だいぶ練習しました。ただ、練習に出てくるということは、家の用事を済ませる時間が減ったり遊びに行けなくなったりと個人の都合もあるので、どれだけ練習できるかはメンバー次第です。

子どもは、西戸地区の小学校2年生から6年生までが参加していて、規定はありませんが、小学生で線を引いています。高学年になると、一緒に踊っている親より大きくなる子もいて、小学校6年生までにしていきます。地元の中学生や高校生は、踊りを見に来る程度ですね。

家によっては親子で出ている家もありますし、3人出ている家もあります。踊る人は22~24人で全員が西戸地区の住民です。

住吉神社で踊った時の挨拶で、西戸地区は28戸で、踊りに参加しているのは踊り手・踊りの師範を含めて全員で36人ですので、踊りの間は西戸地区に人がいなくなって泥棒が入り放題だという話をよくするのですが、人が減って、子どもが0人になったら踊れないと諦めています。来年には2人だけになる予定で、他の地区から呼ぶことも、今のところは考えていません。

百石踊りには私が30歳くらいの時から関わっているので、今年で40年になります。もう現役は引退して太鼓の指導をしているのですが、太鼓打ちが用事で練習に来られないときには、私が太鼓を叩いています。今は会長としてまとめ役もしていますが、保存会の副会長や会計を後継者に考えています。

苦勞するのは、子どもを教えることです。それは他の人にお願いしています。その子の兄や姉が教えてくれることもあります。子どもは練習を嫌がるので大変です。

小学校でも勉強で百石踊りのことが取り上げられていると思うので、周りの見方が変わったらまた違うのでしょうか。

#### 4. 踊りの意義

1つは、室町時代から続いた伝統を後世に引き継いで、またその若い人たちに次の世代に引き継いでいってもらうことが1つの大きな意義があると思っています。我々の先祖が一生懸命苦勞して伝えていったものを、我々が絶やすわけにはいかないと考えるのです。

昭和47年3月24日には、県の重要無形民俗文化財に指定されました。それを無駄にはできない、出来るだけ上を目指して、国の重要文化財やユネスコの世界遺産に登録されたらいいなということを思っています。藤井比早之衆議院議員が来られたら、その話で盛り上がるんです。今からどうするかは、これからの話ですが。

私が会長をするのは、あと1~2年と思っています。早く辞めてもいいけませんし、あまり長

い間務めると、次の人が続かなくなりますから、難しいところです。好きでやっていると思われても困りますしね。



#### 5. 針木さんの願い

若い人に、西戸地区に戻ってきて欲しいという気持ちはもちろんあります。声を大にして言いたいです。百石踊りの存続とは関係なしに、もっと大きな問題として。

でも、考えてみると、帰ってこいと言うのも酷な話だと思います。一旦都会で生活し始めてそこで結婚すると、田舎に帰ってくるのは大変です。私の周りでも、奥さんと子どもは都会に残して、夫だけ帰ってきた人が何人かおられます。親の世話や、田んぼの管理のために帰ってくるのです。中には離婚までして帰ってきた人もおられます。

国としても、都会から田舎へ人口を分散させたいのは分かるんです。でも、都会の方が便利なのは間違いないですからね。私ももうすぐ車を運転出来なくなると思うと、病院や買い物に行けなくなります。都会にいれば、そういう心配はないので。そういった問題を解決しないと、なかなか若い人は帰ってこないと思います。

百石踊りの踊り手については、他の地域から来て欲しいとは全く思っていません。たまたま西戸地区に生まれて、たまたま地元に残って、だんだん歳を取っていく中での百石踊りだと思っています。だから、あまり他の地区から人を呼んでまで活動することは考えていません。

何年も前に、東条東小学校の活動で、「命輝



け東条川」という冊子が作られていまして、我々もその作成の一環で、5、6年生に、昔の良かったことを伝える機会がありました。

子ども達が良いなと思ったのは、今は現実的に出来ない話ですが、当時は学校にプールがなかったので、父兄が見守りの当番をして、子どもが川で水泳をしていたことでした。

その時は、小さな地区でしたが約 30 人の子どもが学年関係なく一緒に泳いでいました。魚を釣ったり、親の目が届かない所まで、いかだで川を上っていったりもしました。

帰るのが4時や5時になると、親が並んで川岸で待っていて怒られたりもしました。でも、のどが渇いた時には川の水を飲んだりした話をしたら、子どもが目を輝かせていました。

10年前に、その子ども達から返事をもらって、話をして良かったと思いました。

治水の関係で、ダムは絶対必要だと思います。我々は百姓ですので、干ばつ時は水が必要です。今までその恩恵を受けて良い米が取れています。

東条川は、今は下水処理がされてきれいになりましたが、それまでは排水がみんな川に流れていました。それは大阪でも東京でも同じことです。

東条湖が完成して、上流からふるけ古家地区、つねだ常田地区、西戸地区の順に秋津水路が通ったのですが、構造物なので、経年劣化してきます。それは土地改良区が修繕してくれるのですが、農地の70%は東条湖からの水が用水になっています。まさに、東条湖の水が命の水ということです。

## 6. 仕事のこと、日本の未来

私は昭和 41 年に東条町役場に入りました。21年ほど勤めて辞めた後、当時は景気が良かったので、友人に紹介されてベビー服を作り始めました。今になって考えると、どちらが良かったのかは分かりません。自営業で今も続けていますが、後継者は考えていません。もっと稼げ

るようなら引継ぎますが、今はもうミシンを踏む縫子さんがおりません。自動車もそうですが、日本製の製品は無くなってきて、どこの企業も人件費の安い海外へ流れています。繊維業界も含め、それが自分の首を絞めることになっています。縫子さんがいなくなることも、日本の産業が衰退していくのも、下請けが海外に工場があるからだと思います。今、日本の産業に必要な金型でさえ、日本から出て行きそうになっていますが、そうすると、いつそう産業が衰退していくと思います。

## 7. これからの百石踊り

百石踊りは、教えて欲しいと言われれば教えますが、積極的に他の地区に教えるつもりはありません。広めれば良いとは思いますが、室町時代から続く伝統は自分たちで守るというのが文化だと思っています。でも、多くの人に見てもらいたいという思いもあります。県の文化財に指定されてからは、見に来てくれる人が増えるよう、チラシやポスターを作ってPR活動を活発に行いました。

はっきり言って、百石踊りは1回見れば、毎年見るようなものではないのは分かっているので、人を呼ぶのが一番難しいと思っています。これからの課題です。案内状はたくさん出しています。



保存会のメンバーは、踊る人と教える人で36人おりますが、だいたい私みたいに踊りは引退して教える人が、PR活動に回っています。加

東市や近隣の市に宣伝していますが、大変です。市の広報誌に掲載してもらうには、早めに作らないといけません。ポスターを作るのも、これまでのデータを見てキャッチフレーズを考えています。そういう仕事は好きなので。

住吉神社以外の場所で百石踊りを踊るといふ希望はあります。毎年、市の教育委員会にお願いしたり、県の文化課に登録していますので、その関係で話があったりしたら参加していたのですが、最近はその話がなくなってきました。市の教育委員会からも文化財の保護という意味で多少の補助金はもらっています。社ステラパークの催しに声がかかったこともありますし、昔は神戸文化ホールにも行きました。一番遠いところでは、富山県に行ったりと、少し前まではあちらこちらに行きましたけれど、これも流行があるのでしょうね。

## 8. 踊りの歌

音頭を歌っていた人が、よく覚えておられたんだと思います。音頭にしても踊りにしても、手伝え口伝えでしたので。私は、室町から始まった百石踊りと今の百石踊りは、かなり変わっていると思っています。どれほど違うかは分かりませんが、口で伝えてこられたということは、そういうことでしょう。もちろん、今の先生方が教えているのは、ここ何年も同じやり方です。変わってくるのは、節目のときだと思います。というのは、間が空いて、久しぶりに踊ろうというときです。

百石踊りでは、4人いる心棒打ちという役の人が、踊りの全体を支配します。一番重要な役です。今からこの歌を歌いますので、みんなで踊りましょうというのがこの4人です。この一番重要な4人はひとりひとり動作が合いにくいので、そこを統一するのが一番難しいですね。私は太鼓を叩いていたので太鼓を教える専門で、心棒打ちだった人が心棒打ちの4人を教えていて、今のところはしっかりした教え手があるので変わることはないでしょうが、教え手が

変わると、ひょっとしたら踊りが変わるかも知れません。少しは変わっても構わないと思いますが。はっきり言って、人口が減っていくと、それが一番の問題でしょうね。

## 9. これから求めるもの

みんなが集まって、百石踊りの問題だけでなく、農業の問題の話になったときは、必ず農業の後継者の話になります。私の考えでは、このまま状況が変わらなければ20年かからずに、この辺りの田んぼが林になると思います。いかにしてそれを防いで、田んぼとして守っていくかということは、国もやっていることです。でも、やはり一番の根本的な問題は、田んぼを耕して生活出来る環境を整えることだと思います。農業は儲からなければ駄目です。それは全国どこでも同じだと思います。昔から百姓というのは、生かさず殺さずという言葉がありますが、今でもそうです。この辺りでも兼業農家ばかりで、百姓だけでは生きていけません。他の仕事で稼いできたお金を、農業に突っ込んでいような状況です。農業一本で生活している人はいません。仮にいても、他の仕事を定年までやって、以後農業をしようという人です。第一、農業では食べていけませんから。畑と水稻の両方を作って生活している人もいますけれども、少ないです。

私の希望というか、夢ですが、環境については、我々が子どもの時のような環境になったら良いと思っています。我々が子どもの時は川へ魚取りに行つて、魚を釣る針にえさを付けて、川に置いておいて、翌日には魚やうなぎが釣れているんです。東条川は改修されて、天神という所から下流は全部改修されました。ただ、その改修の方法が、私たちの思うようなものではないのです。両岸にブロックを並べて、水の流れが一番良いものなのですが、木の根や竹の根もなく、魚の住み着きにくい環境になっています。琵琶湖で言うと、葦が水をきれいにしてくれる作用があるというのですが、その様なもの

もない。費用がかかるかも知れませんが、もし残っている河川を改修するのであれば、自然にも優しい改修をして欲しいと思います。ほ場整備のおかげで、田んぼは 30 アールがひとつの目安になり、大きな機械が入りやすくなりました。利水も良くなったのですが、コンクリート製品で水路を作りますので、魚が住めなくなっています。良いところでもありますし、悪いところでもあります。昔は魚を釣ったり、魚が潜んでいそうな所に手を突っ込んで魚を掴めたりできました。夜には、蛍が顔に当たるほどそこら中に飛び回っているような、そんな農業が出来るのが夢です。時代と逆行しているかも知れませんが。

私の信念の 1 つは、東条川がありますよね、人間というのは、生活するために、何より水が必要です。古来、水があるところに人間が集まってきたと思うのですが、一級河川の水は国のものといわれ、大川瀬ダムを作って阪神間に水を送っています。我々から言わせれば、その水は我々の東条川に流れるべき水だと思うのです。水が欲しいのなら、こちらの水のあるところへ来れば良いのではないのでしょうか。それが昔からの営みですからね。それを一部の人の都合の良いようにしているように思います。

東条川の恵みを再確認し、その素晴らしさを再発見したいと思っています。

## “ふれあい” と地域づくり



### ●実施日

平成 29 年(2017 年) 2 月 17 日

### ●語り手

三村 良三さん (75 歳 : 加東市上福田/県民交流広場「三草ふれあい広場」  
事務局長)

### ●聞き手

宮内 俊輔 (21 歳 : 兵庫教育大学 4 年生) ★

古泉 啓悟 (20 歳 : 兵庫教育大学 3 年生)

### ●オブザーバー

伊藤 万里子さん/県民交流広場「三草ふれあい広場」副会長



## “ふれあい”と地域づくり

### 1. 神戸時代

多可郡野間谷村、現在の多可町生まれです。神戸市役所に就職し人事課研修係で職員の研修・福利厚生などを担当しました。その当時、東京に美濃部さんとか横浜の飛鳥田さんといういわゆる対話路線を流れとした地方行政が進んできましてね、神戸でもそれを取り入れようと言うことで、市民相談部というのができたんです。そのなかの相談課に異動があり、そこで法律相談とか市民相談などいわゆる公聴の仕事をしました。

同僚のなかには、漫画家の故丘あつしさんや放送作家で漫才の脚本家の織田正吉さんなどもおられました。実に楽しい職場で、新聞記者ともずっと親しくしてもらって、メディアの対応の仕方もある程度身についたと思います。

市民相談の公聴いうなかで、対話集会を開きました。特に当時は、神戸市婦人団体協議会という強力な団体があります。その団体を中心に対話の集会を開きましてね、神戸の国際会館なんかでも、2000人入るんですけど、じゃあ2000人集めますって言って、そこに頼んだらきちっと集まるんですね。それほど強力です。各区にも婦人団体協議会があって、ずいぶん仲良くさせていただいて、人口の半分は女性やから、女性を動かせば男性が動くと思いました。

また、市民相談室というのがあって、そこで法律相談とか家庭事件の相談やとか、いろんな交通事故の相談やとか、行政の苦情なんかも受付していたんですね。

そういう仕事の中で、学校開放を担当することになり、夏休みだけですけどプールの開放などをやりました。今になって小学校区での地域活動をしていたら、やっぱり学校は地域活動の拠点であり核になっている、あの当時そういうことを教えられたんだと思います。

そして退職したのですが、仕事は面白かった

んですけどね、やめんといけない必然性も何もなかったんですけど、退職しました。



### 2. 地元での生活

退職するときに思ったことは、もしかして僕がやりたいことができない場合に、やっぱり腹括らんとしゃーないんです。そのときは職業の貴賤を言っちゃいけないけども、何をしてでも生きられるだろうと言う決心でした。

結局、夢破れて、お金もなくなって、卸売市場で朝5時から10時くらいまでアルバイトしました。夏でしたからスイカをトラックに積んだり、配達したり、そういうことをやりました。

アルバイト先の会社の社長から、採用の話がありましたが、いずれは神戸へ行くつもりでしたからお断りしました。ところが今度は、断れない立場の人からすすめられ、元県会議長の神戸先生の会社に勤めることになって、新たに貿易の仕事を始めることになり、それを僕が担当していましたが、社長が県会議員の選挙に出ることになり選挙事務所の方を任されました。選挙の結果はなんと75票差の当選で、あのときは嬉しいとかよりやれやれという感じでしたね。

神戸先生が、一般質問か代表質問を初めてされたときに、その原稿をおまえが書いてくれたんやぞ、言われましてね、そんなことがあったのかなと思います。先生は亡くなられたけど、

いまでも奥様とは、ときどきお出会いしております。ぼくと家内の結婚は神戸先生ご夫妻が仲人なんです。

それから行政書士事務所を西脇で開き、友人達が一緒に仕事をしようと集まり、測量の会社を設立しました。公共測量、民間の測量、開発許可申請、農地転用、建設業許可申請などの業務をしています。多可町にあるサーキット場、ゴルフ場、西脇市や多可町の多くの工場、最近では丹波市や西脇市のこども園などの開発許可業務もしてきました。行政書士としては東播支部長、兵庫県行政書士会副会長などに就き、特に ICT の分野では行政書士会としては先進的な取り組みを行ってきました。また、総務省電子政府推進員に委嘱されていました。

長女が小学生になるときに三村姓に替えて、加東市に住むようになり、数年経つと PTA 会長や民生児童委員など役職を当てられるようになってしまいました。

### 3. 三草ふれあい広場がスタート

平成 19 年から区長をさせて頂いていました。県民交流広場は区長会でいろいろ揉んだすえに、20 年の時から立ち上げたんです。区長会からのトップダウンでのスタンスでは住民の人はついてこない、参画できてもらえないだろう。なんか良い方法ないかということで、ICT の分野でつながりのあった地域 SNS「ひよこむ」主宰者 和崎さんが県民交流広場のアドバイザーなので相談したところ、それやったら、ワークショップ開いた方が良さからと一番最初は和崎さんが、2 回目、3 回目は和崎さんの紹介で、岩木啓子さんに来ていただいて、ワークショップを開きました。

最初、地域の方からは、県民交流広場の事業に取り組むことを前提に実施するのかという意見も出ました。するかしないのかどうかも含めてワークショップを開いて、住民の方々の意見を取りまとめた上で、その上でやりましようよという意見が強くワークショップを進めさ

せてもらったんです。岩木さんは実に有能な方でね、うまくまとめていただいて、”L”isten,”O”pen,”V”oice,”E”njoy の「LOVE」というキーワードでワークショップ開いてもらったんです。



ワークショップには各地域から今日同席して頂いている樹梨さんや伊藤さん方 10 名ずつくらい来られて一所懸命に取り組んでやっていただいたんです。だから、いまでも、補助金切れになっても継続できるのは、一番最初に皆さんでワークショップ開いて、だれもが「頑張ろうや」、「やっぺこう」、「この地域を何とかしよう」、というような機運が盛り上がったから続いているんだと思いますね。意見がまとまって、最初は 4 本の柱で活動しようということになりました。

他の地域を見ると、ややもすれば公民館や集会所などの施設整備に使って活動の方がなおざりになってその資金が終わったら、はい、終わりというような感じの状態もあります。

しかし幸いうちは、この建物が 750 万、残りの活動費 550 万円の補助金も有効活用して 2 年繰り越ししてもらって、できるだけ細く長く金を持ち越してやらしてもらったんです。現在は、活動もレールに乗り市のまちづくり協議会の補助金や区長会からの助成金、他の補助金で今までと同様に活動ができています。



#### 4. 活動重視の取り組み

ワークショップでは、自分の地域のなかにどんな課題があるか、産業がないとか、少子高齢化が進んでいる、交通の便が悪い、婦人会なども解散して集まることが少なくなる、そういう問題点を書き出して、その課題を、どうすれば解決するでしょうかとまとめ、絞り込んだのが4つの柱、①私の村の自慢マップづくり ②防犯と防災 ③イベント（地域間交流、世代間交流） ④都市と農村の交流 ということになりました。

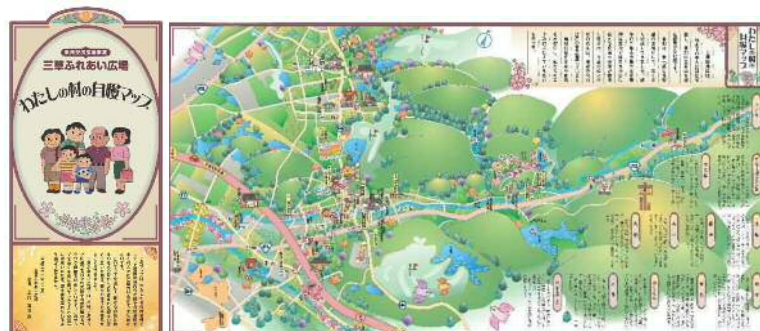
この活動を進めるための拠点をどうするか、各地区に立派な公民館があります。しかし小学校区単位の活動でやるとなったら、やっぱり施設がある。国際学習塾の一室を借りてやればということで、市と話したんですけど、貸してもらえない。結局、国際学習塾の駐車場を借りて現在の施設を作りました。

活動の目的は、当初は4つの柱が大きな目的ということだったんですが、せっかく施設があるんだから、もっと有効利用した方が良くないということで、女の人から喫茶したらどうと提案があり、月に2回、喫茶を始めました。さらには、平成24年から、加東市がやっていた敬老会を地域で敬老会をやってくれということになりました。三草ふれあい広場という受け皿があり小学校区単位で活動していますから、手作りで一生懸命やっていますので、来られる方には、喜んでいただいています。

#### 5. 「わたしの村自慢マップ」・ワクワク探検

県民交流広場の活動は平成20年からはじま

りましたが、一つの活動の柱は「わたしの村自慢マップ」があります。マップを活用したワクワク探検事業で東条川疏水の関係につながっていくということになります。マップづくりは、各区長さんやマップの推進員さんに自分の村の各地域の自慢する場所を出してもらい、編集には試行錯誤して、普通の地図を利用しては楽しくないので手作り感一杯のイラスト的な絵を描いた地図を作りました。ホームページにも掲載していますが、全戸配布しまして、各地域の自慢の場所をコース設定して、ワクワク探検を実施し、BBQ やぜんざいなどを頂きながら地域間、世代間交流を行います。最初は100人足らずでしたが、年々増えて150人ぐらいの参加者がありました。自分たちの地域のことは知っているつもりが、あまりわからなくて、地域の歴史や、歴史遺産、文化などを知り、人材の発掘もできています。



#### 第1回ワクワク探検：やしろ台と山口地区（平成22年4月）

第一回目はやしろ台と山口地区ですけど、まず山口の墓所のお堂と宝きょう印塔を巡り、やしろ台に向かいました。ここは山林を開発した分譲地で大阪などから来られている別荘地なんです。結構立派なお家があって、オープンガーデンなんかもやって頂いたり、ミツバツツジが大変きれいでした。一番最初なので、何回も打ち合わせをしてその地域の方にご案内、説明して頂きました。地域の方が主役になって案内をしてもらって地域を歩くことによって、いっぱい知らないことがわかってくるのです。約90名が参加しました。



## 第2回ワクワク探検：藤田地区（平成23年4月）

二番目は藤田地区。木梨神社に集まって、小山寺、蛇ころびでの山菜採り、桜満開の千鳥川、藤田温泉、三草藩の陣屋の門扉、逆さ川の言われなど歴史探訪を満喫できました。ここでも、地域の方が歩くところを雑木の伐採、草刈りして、歩きやすく整地するなど一所懸命なんですよ、僕たちを迎えるために。案内看板を立てたり地域の案内をやっていただきました。よい天気の中で123名が参加しました。



## 第3回ワクワク探検：牧野～吉馬地区（平成24年4月）

その次が牧野・吉馬地区。134名が参加。ぼくは牧野ですが、吉馬の市議員の高瀬俊介さんのお父さんが、社町長でその先代が衆議院議員。伊藤博文と同じ時代の人です。伊藤博文が書いた額とか当時国会議員が着用した山高帽のマントとかを拝見させていただきました。吉馬を開拓したのが先祖の江戸時代の吉兵衛さんです。

牧野は、山田錦の採種圃場になっており、溜池堤の上から眺めて貰い説明しました。ここからの夕日の眺めは絶景です。また、昔は上福田の各地域で屋台、太鼓、布団太鼓があったんですけど、今は牧野だけです。その屋台を繰り出して見てもらいました。

上福田地域は、三草藩の関係もありますが、牧野は西脇市高松には源頼政公のヌエ退治の話がありますが、源頼政公がヌエ退治した報償

で、牧野とか吉馬の土地が与えられたと言われています。



## 第4回ワクワク探検：上三草～下三草～木梨地区（平成25年4月）

春爛漫の絶好の天気にも恵まれて約150名が参加。上三草は伊藤さんの地元で、下三草は樹梨さんの地元です。山口～上三草～下三草～木梨、ここあたりは、昔の源平合戦のときに平家を追って義経が追いかけてきた合戦の跡地です。三草山合戦も語り継がれています。それから伊藤さん家の前には、道標があって「すぐ大坂」って書いてあるんです。「すぐ」というのは距離ではなく方向の意味なんです。孝女ふさの顕彰碑前ではボランティアの方が紙芝居で説明されました。素晴らしい人材がおられます。数カ所の寺院を巡り、千鳥川の桜堤では満開の桜が探検を楽しませてくれました。

## 第5回ワクワク探検：上福田地区の遺跡や古墳めぐり（平成26年4月）

遺跡や古墳巡りをしました。この三草ふれあい広場から動物管理事務所への間にはいたるところにいっぱい古墳があるんです。山の中にポコポコポコ古墳がいっぱいありまして、行き倒れの人の墓、墓標などがあります。昔はその地域で亡くなった人は地域の一番端の村境のところに埋葬する習慣があったようです。九州とか遠いところからお伊勢さんや善光寺さんへお参りの途中で亡くなられた方の墓があります、自分がいつ倒れるかわからへんと

いう覚悟で、どこで死んでも私はそこで埋めてもらったら良い、という札を持っているのです。その札には自分の村の一番えらい人が印を付いて、よろしく頼みますと書いてある。昔の人はそういう亡くなられた人を手厚く葬られたりされているのです。動物管理事務所の地続きが古墳地帯になっていて、いろんな曲玉とかがいっぱい出てきており、加東市の埋蔵文化財の学芸員の方から説明を聞きました。

このワクワク探検のときも、地域の方が山の中を歩けるように草木を刈り取って頂き、学校の先生だった藤原武史さんから詳しい説明をお聞きしました。130名が参加。



### 第6回ワクワク探検：昭和池の歴史と先人の遺業を訪ねて（平成27年4月）

新緑とミツバツツジが咲く中を、やしろ国際学習塾駐車場で集合し、上三草磨崖仏～西国巡礼行き倒れの墓を巡って昭和池に到着。余水吐けからは滝のように水が流れ落ち私たちを迎えてくれました。

東条川疏水には昭和池水系と鴨川ダム水系の2系統があります。昭和池は東条湖よりもはやく造られています。北播磨地域は肥沃な土地でありながら、降雨量が少なく溜池に依存していたんです。水不足を解消するために、一大決心をして昭和3年に着工されて、8年に完成しました。堰堤の長さは205.4m、高さは31.2mで県内第3位、貯水量は1502千m<sup>3</sup>で県内第2位の規模の巨大ダムです。当時は重機はありません。トロッコやもっこで土を運びロー

ラーで踏み固めたりしたんですね。経費、工期、組織など難問題がありました。土砂崩壊などで沢山の方が犠牲になり慰霊碑には、日本人、朝鮮人の名前が記してあります。様々なこの苦難を乗り越えて、一切の手抜きもされずに施工されているから、現在も全く漏水もなく豊かに水を貯めています。

当日は、堰堤を見上げながら、甲南女子大学非常勤講師岸本清明さんから説明を聞き、先人達の英断で地域が一团となって様々な困難を乗り越え、素晴らしい水利施設を造って頂いたことに、改めて感謝し、昭和池からの貴重な水を恵んでもらっていることを再認識しました。

その後堤防を上がり、記念碑の前に集い、水面に桜の花びらが散る様を眺めながら昼食交流をして帰路につきました。雨上がりの肌寒い天気でしたが、113名の参加があり、地域探訪と交流を深めました。



### 第6回ワクワク探検(2部)：東条川疏水巡り（平成27年11月）

4月に昭和池を探検したので、11月に鴨川ダム水系の東条川疏水巡りを実施しました。三草ふれあい広場に集合して、バス2台に分乗。鴨川ダム(東条湖)～安政池～曾根サイフォン～六ヶ井円筒分水～広沢浄水場を巡ってきました。説明は、土地改良施設専門員の山際丈さんが分かりやすく説明して頂きました。普段何気なく見ているサイフォンの仕組みを知って驚きです。現代だったら、モーターでポンプアップし送水するんですが、僅かな高低差を利用して、



開水路、水路橋、サイフォンなど地形に合った方式で何キロにも及んで山を越え谷をわたり送水しており、すごい技術力に感嘆しました。円筒分水も実に合理的なよく考えられた配水施設です。その規模は 108km の及ぶ水路網で東条川疏水ネットワーク博物館の誇る施設です。あちこちで見受けられるので、ちょっと関心をもって見て下さい。私の田んぼも昭和池から給水を受けており。地域にも円筒分水があって給水調整をしています。山田錦栽培には不可欠の水利施設になっています。

県議会議員藤本百男様からは、ご自身の著書「東条川疏水ネットワーク博物館」を配付頂き、この 2 回の東条川疏水巡り通じて東条川疏水ネットワーク博物館活動を知るようになりました。平成 27 年 11 月 23 日やしる国際学習塾での「東条川疏水ネットワーク博物館オープン記念シンポジウム」に参加したり、平成 28 年 11 月 23 日には下東条体育館などで開催された「東条川疏水の日」シンポジウムにも三草ふれあい広場の方々と出かけました。4 人組音楽グループ「Oranche (オレンチェ)」の「東条川疏水の歌」を初めて聴きました。楽しかったですね。東条川疏水が改めて地域の貴重な財産だなあと再認識しました。



### 第 7 回ワクワク探検：社のまちをぶらり探検 (平成 28 年 4 月)

今回は上福田地区から外へ足を伸ばし、加東市役所 5 階からの眺望～佐保神社～持寶院の日本一の木造の大師座像～観音寺と赤穂義士四

十七士の菩提所を探訪しました。案内は、加東市の観光ボランティアガイドさんをお願いしました。天候に恵まれて 88 名の参加がありました。

### 第 8 回ワクワク探検：五峰山光明寺巡り（平成 29 年 4 月）

今回も地区から外へ足を伸ばし、五峰山光明寺へ。夕陽が沈む五峰山はよく眺めています。なかなか、お詣りはできません。当日は幸い雨も上がり観光ボランティアガイドさんの案内で四塔頭などを巡り、遍照院では住職さんから法話を拝聴し、通常は 5 月 3 日のみ開帳される国の重要文化財「銅造如来座像」を特別に拝させていただき、まだ謎多き秘話をお聞きしました。駐車場まで帰ってくるや雨が降り出し、佛の加護と感謝して解散しました。約 80 名の参加がありました。



## 6. 防犯と防災活動

防災と防犯活動は、地域毎に自主防災組織があります。また、消防団が各地域にあってそのうえに加東消防署があるわけですが、初期消火がものすごく大事なんです。初期消火には、地域の消防団がメインになるんですが、消防団の方のほとんどが仕事で外へ出ていて、昼間は家におらへんわけです。昼に家におるのは年寄りと、女の人も仕事に結構出られているから、ごく限られた方しか、村にいない状況です。すぐにだれでも初期消火ができる、消火栓を開けてホースつないで水をかけることは大事です。そういう身近な問題として消火訓練しようと



いうことで、三草のやしろ国際学習塾、グラウンドや各地域でも放水訓練をしました。また、地域には消火栓がありますが、どこに消火栓があるかわからない。しかも消火栓は道路にあるから、砂利が詰まってふたが開かない。普段から開けるようにしとかないといけないので、そういった点検もかねて消火訓練をやってきました。

それから各家庭の台所で火が出たときに、すぐに落ち着いて初期消火できることが大切。消火器を使った消火訓練や濡れた布をぱっとかぶせて消す方法とか、そういったのを訓練をしています。



それから、やしろ国際学習塾は公の施設なので毎年1回か2回は、避難訓練をしないといけません。それで上福田地区の住民と合同で消防自動車に来て消火訓練をしたり、避難訓練をしています。去年は加東市フィルハーモニーの演奏中に火事になった想定で、音楽は15分ほど聴いて、火災のアナウンスがあって誘導されて逃げました。その前は加東市がはしご車を新しく買ったからと、国際学習塾の2階の窓から避難する訓練をしましたね。

防犯の方は、いわゆる座学的なものが多いのですが、漫才のまるっち〜ずさんや警察の方に来てもらって開催したりしています。

それから、総会や定例会を2ヵ月に1回の開催時には、三草交番の駐在さんに来てもらって、その時々防犯とか、防災の関係についてのお話をさせていただいたりしています。

## 7. 都市と農村の交流

都市と農村の交流を活動の柱にしています。三草小学校が猪名川町の三草山つながりで、小学校同士が交流をするという話があり、それを応援するというか、いっしょに交流しようと最初はスタートしましたが、田舎同士なので都市と農村の交流にならず頓挫したんです。

それじゃ県民交流広場同士で交流しようと、取り組んでいた ICT の関係の講演会やフォーラムでお世話になった地域 SNS「ひよこむ」の和崎さんや当時の兵庫県情報政策課の紹介で講師をお願いした明石の増田幸美さんに相談しました。増田さんは「上福田も明石も東経135度つながりやないの、そしたら明石のどこかと交流したら」ということで、江井島の当時の市議員木下さんのご尽力で江井島とお見合いして交流がはじまりました。

平成22年から交流が始まると、ゴルフ練習場の講師で上福田に来ているとか、職場の先輩後輩だとか、実家が北播磨ですとか、身近な方々がたくさんおられるんです。

最初は、グラウンドゴルフや、ゴルフコンペで交流を始め、江井島スポーツフェスティバルへの模擬店出店、明石天文科学館見学、明石架橋見学で親交を深めていきました。

三草山登山には江井島のみなさん方と三草保育園児と一緒に参加しましてね、園児の元気にお返しがしたいと、江井島から木下さんがリーダーの人形劇団が三草保育園に来られて、加東市内の保育園児も集まって人形劇を楽しませて頂きました。



平成 28 年には、三草小学校の茶摘みを江井島の方にも楽しんでほしいと呼びかけまして、とりあえず役員の方々にお越し頂き手もみ茶なども体験してもらいました。こんな体験はなかなかできません。平成 29 年は小学生も一緒に約 30 余人が参加され三草小学校の児童とも交流しました。

## 8. 都市と農村の交流を通して

今年は、江井島の地域の方の呼びかけで小学生が茶摘みに参加してくれましたが、学校としての交流に繋がればええなあと思っています。また、江井島は海のまちですから「海で遊ぼう！」というイベントをされています。僕や役員が参加しましたが、親子対象の行事やから、ぜひ、子ども孫を連れて楽しんで交流を深めたいと思います。

上福田と江井島とは、1 : 10 の人口比があり、規模が違う集落とやるわけやから、刺激もあります。ゆくゆくは、昼間人口でも増えることにつながれば、よいなあというような思いはありますね。それからこの地域で農産物などといったものの販売とか、アンテナショップといったものも考えても良いと思います。



## 9. 地域づくり・交流のポイント

なにかやるときは、沢山の方に集まって参加して欲しいとの思いで企画します。ワクワク探検や視察旅行は多いです。冬花の寄せ植え教室、フラワーアレンジメント、そういう文化的な活動には女性の申込みが多く人気があります。ふれあい喫茶も、だいたい毎回 30 人から 40 人というところでしょうかね。三草こども園の園児

がここへ来て歌を歌ってくれたりするのが月に一回あるんですけど、そんなときは満員ですね。遠方からもおじいちゃんおばあちゃんがきてくれるし、普段来ない人も来てくれるし、園児はスターです。

喫茶には、区長さん方も来られるから、臨時区長会のような話し合いの場になります。

今日はこの広場で絵を貼っていますが、地域の住民の作品展示場にもなっています。小学校の子の絵とか、地域の方の立派な絵画やちぎり絵、手作り品、この間は、寄せ植え、盆栽を立派に造っておられてそれをたくさん持ってきて展示されたりします。各地区が持ち回りのボランティアで当番するんですけど、その地域に掲示をお任せしているんです。ある意味、各地域の競争がありますね。

## 10. 活動の成果と課題

まず成果としては、10 集落あり、それには公民館などがあって、地域活動ができています。県民交流広場はそれを小学校区単位でやっているわけです。例えば、やしろ台という地域は分譲地で大阪からの移住された方とか、週末だけ来る方とかがいらっしゃいます。これまでは既存の集落とは交流がほとんどなかったのですが、交流がはじまりました。これまでその地域に足を踏み入れることさえもなかったのが、一番はじめにワクワク探検をやって、一挙に交流がすすみました。よい成果だったですね。

また、雇用促進事業団の宿舎があります。若い方が入居されていますので、仕事などの関係で広場の事業活動には、参加は少ないのです。入居者の方は数年後には移転される場合が多いのですが、ここで生まれた子供にとっては、上三草が生まれ故郷なんです。今の自治会長さんは広場の活動に参加されています。世代間もそうですけど、地域（集落）間の交流なんかも結構役立っていると思っています。児童減少により運動会も地域と一緒に開催していますし、小学校のふれあい茶摘み大会も同様です。





それから、数年前に市から敬老会事業を地域でやってくれへんか言われたときにも、すでに受け皿ができていたから、スムーズに敬老会活動なんかできております。広域的な小学校校区の活動としては、結構成果は上がっていると思います。

課題は、人を集めたり、連絡したり、また、人材発掘といえば大袈裟ですけど、何かするときに地域の方に、「あんたちょっとすまんけど、これ手伝ってやってくれよ」とか、僕らが直接お願いするよりも、その地域の区長さん、自治会長さんからお願いするという格好にならざるを得ないです。昔ながらのここは地縁社会がまだまだ濃厚です。イベントの募集などは、回覧とかの方法で周知はしていただいています。しかし、これから新聞に載っていましたが、「PTAに入るの嫌や」とか「自治会入るの嫌や」とかね、そういう方たちが出てきて、旧来の地縁社会と関わりを持たずに、新しい自分たちの好み、あるいは目標とかに合致しないものはするけども、地縁活動には深く関わりたくない、というような人たちもでてくる、そこんところをどういうふうに、対応するかは課題と思うんですね。

もう一つは、僕たちのやっていることは、100%ボランティアで無報酬ですが、次の方に引き継いで行くときにどういう組織にしておかなければならないのか、人材を発掘していくか、人材養成していくかということが、他の地域でも一緒やと思いますが課題ですね。



## 11. 活動の発信

活動の発信は、ホームページと地域 SNS「ひよこむ」、個人的に Facebook でお知らせしています。メールも使っていますが、FAX はかなり普及していますので、部会などの連絡は FAX で連絡することも多いです。地域の住民へ周知は、前に話しましたが、区長さん、自治会長さんを通じての回覧・配布に頼っています。メディアへはプレスリリースを配信したり、持ち回ったりして、記事にしてもらったりしています。また、兵庫県の「北播磨ふるさとフェスタ県民交流ひろば大会」、加東市の「市民活動発表会」などへの参加を通じて情報発信をしています。



## 12. これからの三草ふれあい広場活動

折角、県の補助事業でスタートしたわけですので、立ち上げて約 10 年近く続いているのは最初に地域の方がワークショップを開き、ぜひやろうと言う気構えで、内容もしっかりしているから続けていけていると思います。地域の方々も楽しみにされていますし、これからも楽しくやっていきたいものです。

と言いながらも、明石の江井島とももっと交流したいけどバス1台借り上げるにしても経費がかかります。自己負担をこれまで以上にお願ひせざるを得ないと思いますけど、ほかの補助金も利用して、今までの事業を継続しながら無理のないところでやっていきたい。

基本になるのは、やってる人が楽しくないといけない。これがもう一番ですよ。世話している人が「こんな面白いのに…」と言うたら何したってもダメです。ここへ来たら面白いな、あの人に出会えて、喫茶に来て今日も話ができる。あるおじいさんはこの頃ちょっと体調崩して来られてないけど、今度誘い合わせて喫茶行こうかなあと言ったりして、次回にお越しなっていたりしています。

組織のあり方についても、難しいシステムにしたら、ややこしくなってしんどくなる。だから堅苦しくルールを決めるのはあまりしたくない。それぞれにやられることを尊重しながらやっていくというのがいいかなと思います。理性のある方ばかりやから、気を遣いあつて、お互いに情報交換しながら、楽しくやっていただいています。

### 13. 活動のエネルギー源

人間1人では生活できませんから、家族、隣近所、集落、地域と皆さんが助け合って協働して地域活動ができる楽しい環境作りが、一番エネルギーのもとかなと思ったりします。個人的にはついでにお酒の話そこでしたら最高ですけど。山田錦とかね。

実際、今の構成員や役員の方々は、責任感持って定例会、総会に出席し、そこで決めた行事には一所懸命取り組んでいただいています。こども園児や小学生達も含めて世代間の交流、地域間の交流ができていることが、地域活動のエネルギーになっていると思います。



●聞き書きに参加して

## ●聞き書き参加者

### ○藤原杏里（兵庫教育大学3年生）

私の家は一応田んぼを所有しているのですが、私が物心ついた頃から他の農家さんに田んぼをお貸しして作ってもらうようになったので、農家のことはほとんど知識がありませんでした。そんな中、今回、藤原進さんのお話を聞かせていただくということで、少しの緊張と期待を持って臨ませていただきました。

今回、藤原進さんのお話を聞きながら、日本の農業について考えました。日本の農業従事者数は年々減ってきており、それに伴い高齢化が進んでいます。藤原進さんの話にあったように、お米を作るのならば高額な機械も必要で、天候によって収入も不安定です。また外国からの安い農産物もたくさん輸入されています。日本の農業は生き残れるのだろうか、ということを考えずにはいられません。この問題にこの場で答えを出すことはできませんが、今回のような機会がなければ私も深く考えることはなかったであろうことであるので、それだけでも聞き書きプロジェクトに参加した意味はあるなと思いました。

豊富な経験を持たれた地域の方のお話を聴くというのは私にとってとても有意義な時間でありました。将来教師となったときにも、子どもたちにこのような機会を持たせてあげることができたらどんなに良いかと思うので、そのような機会を作っていきたいと考えています。

## ○古泉啓悟（兵庫教育大学3年生）

兵庫県で生活して3年が経とうとしていますが、昔からこの地域に住み文化を守り続けている人のお話を聞く機会は初めてでした。何か調べたりするために地域の史料を活用することはよくありますが、生の声を聞くことは中々ありません。そして話の内容を文字に書き起こす作業も初めての体験でした。慣れないことばかりで不安はありましたが、サポートをしてくださった方々、私の質問に分かりやすく答えてくださった語り手さんのお陰で充実したものになったと思います。話を聞いていく中で分からない言葉や知らない方言も多々出てきましたが、それは自分と語り手さんの生きてきた環境や文化の違いによるものであり、そういった自分の当たり前と他者の当たりのギャップも面白く思いました。私は現在教育について勉強をしています。そのため、私が語り手さんにお尋ねする内容も子どもの頃の生活であったり、現在の地域に住む子どもについてであったりと教育や子どもに関する質問が無意識のうちに多かったように思います。つまり、私と違う人が聞き手になっていれば今回の内容は変わっていたのではないかと考えることもでき、この聞き書きプロジェクトは語り手の人生を明らかにしてだけでなく聞き手の経験も大きく影響していると思います。大袈裟ではありますが、自分にしか出来ない、自分だからこそ出来た内容になっていると思っています。声をなるべくそのままの言葉で文字に表そうと努めましたがとても難しかったです。しかしそのようにすることが多くの人に語り手さんの人生、考え方を伝える方法であり、もし私が要約したものであれば無意識のうちに私の価値観が入ってしまい易いと思います（今回も入っているかもしれませんが）。今回聞いたこと、感じたことを今後、様々な場面で活かしていきたいです。私は社会科を専門とした教師を目指しています。子どもたちに先人たちの生の声を伝えていくのも大人の役目だと思いますし、教師の役割でもあると思っています。聞き書きはその一つのツールであり、授業研究をする際にも行っていきたいと思いました。

## ○宮内俊輔（兵庫教育大学4年生）

難しい。

これが聞き書きを初めて体験した感想である。地域の方にお話を聞いて、それを書き起こす。簡単そうで全く簡単ではない、そんな聞き書きであった。

まず、語り手さんからお話を伺うにあたって、事前に質問を考えていたものの、実際にお話をさせていただくなかで、聞き手が思うように質問を展開できない場面が多かった。しかしながら、本来であれば、そのような話のなかで適宜質問を組み込みながら、語り手さんの話を深め、広げていくことが求められているのではないだろうか。そのようないわゆる“話を誘導する”ということがあまりできなかったように感じる。結果として、本題である三草ふれあい交流広場の核心に迫ることができなかったのではないだろうか。

また、書き起こしについても、大変難しい作業であった。そのまま書き起こすのであればそれほど労せずできることであるが、ある種の文芸作品として仕上げるにあたって、語り手の人格を崩さず、なおかつ文章として読みやすく、ということが困難であった。実際にお話を伺って感じた語り手さんの人格をどのような表現でつたえるのか、つまり、作品集の読者に語り手のひととなりを伝えるための表現方法をどのようにすれば良いのかという点が本当に難しいものであった。

今回、東条川疎水ネットワーク博物館の聞き書きプロジェクトに参加できたことは、私にとってとても貴重な経験になった。地域のお年寄りに直接お話を伺う機会は多くない。そんな人生の先輩にあたる方からお話を伺えたことは有意義なものであった。また、今後教員として、地域住民から聴き取りをおこなったり、調査先で様々な方からお話を聞いたりする機会もあるだろう。そのようなときに今回の聞き書きを役立てることができればと考えている。



## ●聞き書きプロジェクト参加者

## ●聞き書きプロジェクト参加者

< 2015年 >

### ○語り手

内藤正克（株式会社内藤設計相談役会長）

藤原 進（東条山田錦振興会会長）

### ○聞き手

鈴木朝道（神戸大学大学院生）

渡辺幸太（兵庫教育大学大学院生）

藤原杏里（兵庫教育大学3年生）

### ○協力

南埜 猛（兵庫教育大学 大学院学校教育研究科 教授）

< 2016年 >

### ○語り手

針木 功（西戸百石踊り保存会会長）

三村良三（県民交流広場「三草ふれあい広場」事務局長）

### ○聞き手

古泉啓悟（兵庫教育大学3年生）

宮内俊輔（兵庫教育大学4年生）

### ○協力

福井茂樹（兵庫教育大学 副学長）

吉水裕也（兵庫教育大学 大学院学校教育研究科 教授）

### ○事務局

山際 丈（兵庫県 北播磨県民局 加古川流域土地改良事務所 農村計画第2課  
東条川疏水ネットワーク博物館 担当）

弘中文字子（兵庫県 北播磨県民局 加古川流域土地改良事務所 農村計画第2課）

阿部一枝（兵庫県 北播磨県民局 加古川流域土地改良事務所 農村計画第2課）

株式会社地域計画建築研究所（アルパック）：

畑中直樹（役員 大阪事務所副所長 部長（サスティナビリティ マネジメント））／森野真子（研究員）

**地域の人生をほりおこす  
聞き書きプロジェクト 2015～2016 作品集**

平成29(2017)年3月 発行

編集・発行 東条川疏水ネットワーク博物館会議

問い合わせ 東条川疏水ネットワーク博物館会議事務局

(兵庫県北播磨県民局 加古川流域土地改良事務所内)

〒673-0423 兵庫県三木市宿原字寺ノ前70番

電 話 0794-70-7006

E-mail kakogawatr@pref.hyogo.lg.jp

URL [http://web.pref.hyogo.lg.jp/nhk08/toujyougawasosui/10\\_hakubutukan.html](http://web.pref.hyogo.lg.jp/nhk08/toujyougawasosui/10_hakubutukan.html)